

学校だより

プラタナス



令和2年11月6日(金)

No.27 市川市立市川小学校
校長 蜂須賀 久幸

<https://ichikawa-school.ed.jp/ichikawa-sho>



誰かのために書いた文字には、力がある！

人口の減少や他人との付き合い方の変化、慣習に対する姿勢の移り変わりなどのほか、インターネットやソーシャルメディアの普及により、年賀状や手紙のやりとりが確実に減っています。メールや Line でのやりとりは手軽で簡単ですから、手紙などで文字を書くこと自体に抵抗感が増しているのかもしれませんが、しかし、新型コロナウイルス感染症対策で人と人とのかかわりが難しい現在、親しい人に手紙にしたためて思いを伝えることも大切にしたいと思います。

ステーションナリーの製造・販売をする企業「パイロット」のキャッチコピーが目に残りましたので紹介します。

(1)たった一人の「いいね」があれば、本当は、いいのかもしれない

たくさんの「いいね」がないと、少し不安になる。
簡単につながれる時代のせいかもしれません。
でも、思うのです。百を超える「いいね」より、たった一人に頷いてもらいたい時がある、と。
大切なあの人だけに伝えたい、みんなとはシェアできない言葉。
一人を思い、一人に書く。文字にならない気持ちまで、にじんできく。
そうして、もらえた返事は、きっとかけがえのない「いいね」になるはずです。
さあ、一本のペンを。
誰かとつながる一番の道具は、たった一人を思って選んだ言葉、だと思うから。



(2)お医者さんより効くこともある

それは、一人で暮らすおばあちゃんに、お孫さんが送った手紙かもしれません。
それは入院しているお父さんに、子供たちが渡した手紙かもしれません。
それは、恋や仕事でちょっとうつむいている人に、友人が渡した数行の言葉かもしれません。
きっと、特別な言葉や飾った言葉じゃない。
ふだん何気なく、あたりまえに使っている、普通の言葉。



でも、誰よりも思ってくれる人が書いた言葉は、
その人の胸のいちばん奥まで沁みこむ言葉になる。
どんな名医より、どんな薬より、ココロとカラダを喜ばせる言葉になる。
誰かのために書いた文字には、力がある。それは誰でも書くことができる。
あなたも、ペンをとりませんか。

9月末には、3年生が国語科の学習で、季節感の表れる手紙の出だしを工夫するとともに、内容を工夫して丁寧に手紙文を書いていました。あれからひと月は経ちましたので、大切な誰かのもとに優しさや温かい思いが届いたかもしれません。「文字にならない気持ち」までにじんだ手紙が…。

後期からの学習や生活への取り組み方について

新型コロナウイルス感染症予防のために、児童の生活様式の見直しを少しずつ進めてきました。後期に入りましたので、国や県、市のガイドラインを参考にしながら、来年度も見据えた持続可能な取り組み方にシフトしてまいります。

どの取り組みにおいても、マスクの着用(※)や丁寧な手洗いは今後とも徹底してまいります。ご理解とご協力をお願いいたします。 ※個の事情や場の状況によって柔軟に対応する場合があります

【各教科では？】

- *音楽の歌唱指導は、十分な換気の下で適切な距離をとりながら、向かい合わないなど歌う方向に気を付けて行います。
- *これまでの鍵盤ハーモニカやリコーダーの指導は、指づかいまでにとどまりましたが、換気、距離、向きを考え、自分以外には触れさせないなどのほか、楽器から出る水分等の処理に気を配って活動します。
- *家庭科などで調理を行う場合は、身支度や手洗いを徹底し、グループの人数・配置を工夫します。また、調理器具や食器類の衛生には十分気をつけます。料理は調理を共にした班のみ、かつその場で食すようにします。
- *体育では、校庭や体育館への移動の際はマスクを着用します。また、熱中症の心配がないので、激しい運動以外はマスク着用が望ましいと考えます。運動後は、着替えより手洗い優先に努めます。

【給食の時間では？】

- *給食は、これまでどおり話をせずに全員前向きで食べます。ただし、和やかな雰囲気づくりには配慮します。給食当番の健康チェックは引き続き行います。

【清掃は？】

- *これまでは雑巾がけを行っておりませんでした。ガイドラインに沿って、換気のよい状況でマスク着用を教職員が確認したうえで行うことを始めます。トイレ掃除も同様とします。大勢がよく手を触れる箇所や流し台は教職員が行うようにします。

= 認知症ってなんだろう？ =

十月の読書週間に、児童から読書郵便が届きました。『たぬきの教室』『ぼうしねこは ほんとねこ』『忘れてもすきだよ おばあちゃん』『ふしぎ駄菓子屋銭天堂』『いちねんかん』しやばけシリーズの五通です。この中の『忘れても…』は、アルツハイマーのおばあちゃんと主人公のお話。病気の理解とその関わり方が何よりも大事であることを再認識できます。

認知症は誰もがなりうるものであり、家族や身近な人がなることも考えられます。二〇二五年の全国の認知症高齢者数は、約七〇〇万人になると推定されているからです。そして、この認知症は、高齢者のものとはばかりは言えません。

認知症の人が住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けていくためには、行政だけでなく地域住民など多くの人々が、地域ぐるみで認知症の人や家庭を支えていく必要があります。

小学生をはじめとした子供たちが、認知症に対する理解を深め、認知症の人やその家族にどんなことができるのか考えて、温かい目を注ぎ行動できるように「思いやりの心」を育むことがこれからの時代に不可欠といえます。

下のパンフレットを、校長室前に置いてあります。大人も子供も手に取って、少しでも関心を向けてくれることを願っています。

